

神奈川県三浦市の地域振興と観光まちづくりに関する一考察

-明治大学商学部「特別テーマ実践科目 C/D」実習報告書-*

初瀬川 岳史(4 回生)・林 滢美(3 回生)・松尾 隆策*
明治大学商学部

A Study on Regional Development and Tourism Development in Miura City, Kanagawa Prefecture: Report on the Practical Course C/D of the Faculty of Commerce, Meiji University*

Takeshi Hatsusegawa, Remi Hayashi, Ryusaku Matsuo
Meiji University School of Commerce

神奈川県三浦市は、近年は人口減少が進み、2019 年に「消滅可能性都市」と指摘されている。本研究では、現地で聞き取り調査、アンケート調査をもとにして、地域の活性化策として期待される観光振興に寄与する新規の観光商品の企画・開発を行なった。市では、現在の三浦市の観光特産品は、海産物や生鮮野菜など重く保存期間が短い商品が多く、持ち運びが便利で保存が楽な商品が少ないことが課題となっていた。そこで明治大学商学部「特別テーマ実践科目 C/D」では、地域の団体と連携することで、三浦市を代表する長く愛される新たな観光商品を開発することを目指し、顧客に価値を訴えるため、商品の「物語性」を重視した商品の開発を試みた。新たな観光商品は、三浦初声高校都市農業科と連携し、地元のニホンミツバチのはちみつを使用した「三浦はちみつクッキー」の開発に取り組み、試作品の紹介と共にその効果を検討した。

キーワード：神奈川県三浦市、消滅可能性都市、新規観光商品、物語性、三浦はちみつクッキー

In recent years, the population of Miura City, Kanagawa Prefecture, has been decreasing, and in 2019, Miura City was designated as a “potentially disappearing city”. In this study, we planned and developed new tourism products that contribute to tourism promotion, which is expected as a regional revitalization measure, based on interviews and questionnaire surveys. In the city, the current tourism specialties of Miura City are heavy and have a short shelf life, such as seafood and fresh vegetables, and there are few products that are easy to carry and store. Therefore, the Faculty of Commerce, Meiji University, “Special Theme Practical Course C/D” aimed to develop a new tourism product that represents Miura City and will be loved for a long time by collaborating with local organizations, and tried to develop a product that emphasizes “narrative” of the product in order to appeal its value to customers. As a new tourism product, we worked on the development of “Miura Honey Cookie” using the honey of local Japanese honeybees in cooperation with the Department of Urban Agriculture, Miura Hatsune High School. We introduced a prototype and examined its effect.

Keywords: Miura City, Kanagawa Pref., Disappearing city, New tourism product, Narrative, Miura Honey Cookie

* 明治大学商学部、明治大学「道の駅」研究所

研究責任者：明治大学商学部特任准教授 松尾隆策

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1 駿河台キャンパス研究棟(14 号館)B312 号室

TEL:080-3415-7257, email: matsuo078@meiji.ac.jp

1. はじめに

神奈川県三浦市は、神奈川県の南東部で、三浦半島最南端に位置する市である。マグロの水揚げで有名な三崎漁港や農業などで知られる。また、温暖な気候であり、サップやヨットなどのマリンスポーツを目的に訪れる観光客も多い。

三浦市は2019年には、神奈川県内の市では唯一「消滅可能性都市」に指定され、三浦市の人口は1994年の54,339人をピークとして毎年減少し、2023年6月時点で40,505人と9年間で約14,000人減少している。2045年には、1995年のピーク時の人口の半分以上に落ち込むことが予想されている。そして、総人口のうち65才以上の高齢人口は2020年では40.9%であり、2045年には56.1%と総人口の半分以上を高齢人口が占めると予想されている(図1)。

消滅可能性都市とは、出産の中心となる20～30歳代の若年女性の人口が、2010～2040年の間に5割以下になると予測される自治体を指し、神奈川県内では、三浦市、二宮町、大井町、松田町、山北町、箱根町、真鶴町、湯河原町、清川村の1市7町1村が、相当すると指摘がされている。三浦市はこの人口減少と高齢化という喫緊の課題への対策として、三浦市は安定した雇用の創出、新しい人の流れをつくること、若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶えることを基本目標に掲げ、「三浦市らしいライフスタイルの発信や、若年世帯から中高齢世帯までがそれぞれの志向にあった住宅を選択できるよう特色のある多様な住宅地の整備に取り組み、転出抑制、転入促進を図る」施策に取り組んでいる。現在、同市では、京浜急行電鉄との協働体制を築き、観光による地域活性化を目指している。

2019年度より明治大学と三浦市とが協定を結び、社会調査を通して市の現状把握、課題の発見・解決策の提案を行う実習教育を実施してきた。本年度2024年度は「地域振興と観光まちづくり-基礎編」をテーマに掲げ、神奈川県三浦市の観光振興の取り組みに関する現地調査を行い、同市の観光まちづくりの取り組みについて分析を行った。まず、春学期「基礎編」では、以下の2回を実施した。第1回調査「道寸祭」(実施日5/19)、第2回調査三浦ブルーワリーに関する調査(代表取締役社長小松哲也氏、実施日2024年6月9日)。

そして秋学期の「応用編」では、歴史的に市の基幹産業とされてきた漁業の衰退を背景とした、6次産業化政策を推進する三浦市の政策と合致させるべく、新たな特産品の創出を目指した。6次産業化の一端として、三浦市初声高校農業科ボランティア部にて行われているはちみつ作りと、そのはちみつを使用した観光商品開発の試作品製

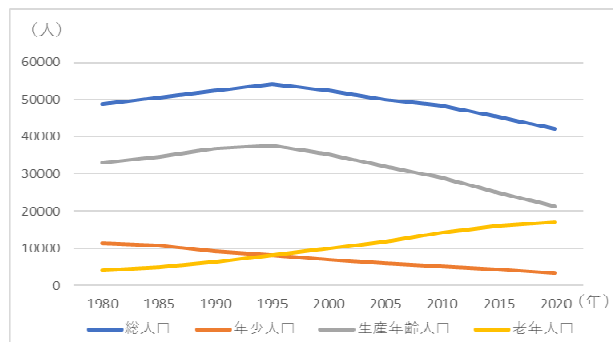


図1 三浦市の人口推移

出所:総務省「国勢調査」、厚生労働省「人口動態調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

注:2020年までは「国勢調査」のデータに基づく実績値、2025年以降は「国立社会保障・人口問題研究所」のデータ(平成30年3月公表)に基づく推計値。

作に関する調査研究の結果を取りまとめた報告書である。

現地調査は、10月12日と11月9日の2回にわたって実施した。第1回調査(10月12日)では、三浦初声高校農業科のボランティア部のもとで進められてきたはちみつ作りの過程を調査し採取に同行した。そして第2回調査(11月9日)では三浦初声高等学校において、日本ミツバチから採取したはちみつを使用した観光商品作成の一環として菓子類の試作の取り組みに参加するとともに、聞き取りによる実態調査を実施した。

第2節では三浦市の観光まちづくり政策について述べ、第3節では現地でのインタビュー調査の結果を示し、そして第4節では、調査結果から得られた知見と問題点への対策を提示する。

2. 三浦市の観光まちづくり政策

三浦市では、入込観光客数の維持・増加へ向けて、6次経済の構築による観光振興を目指している。三浦市が2021年に掲げた『三浦市観光振興ビジョン』によると、同意政策の方針は、次の様に記述されている。

三浦市の観光業は、農業、漁業・水産業と並ぶ市の基幹産業のひとつであり、観光施策の推進により地域経済の活性化を図ることが求められている。そのため、観光業、農業、漁業・水産業といった3つの営みを基礎としながら、それぞれの業種がつくり上げてきた生産、加工、流通・販売など一連のビジネスの「しくみ」を共有し、業種の枠組みを超えて連携することで三浦市ならではの6次経済の構築を図り、観光客の多様なニーズに対応した複合的な観光サービスを提供するなど、観光振興に繋げることを目指

すと記載されている。

なお、同市は観光業を農業、漁業、水産業と並ぶ重要な基幹産業と位置づけ、基幹産業同士が連携することにより、6次経済の構築を図り地域経済の活性化を図ることを目標としている。

3. 現地での調査概要

3.1. 基礎編 第1回調査

基礎編の第1回調査(5月19日)では「道寸祭」に諸役として参加し、地域住民の地域活性化の取り組みを調査するための参与観察を行なった(写真1)。

「道祭り」は、鎌倉時代初期から室町時代にかけて同地を治めた三浦一族への慰霊のため行われているものである。三浦市は開催目的を、「祖霊の慰霊のため、三浦一族のお家芸であった笠懸を開催することにより、この地に残された文化、遺産を広く世に紹介し、かつ、観光振興の一助とするため、道寸祭りを挙げる」と開催の目的を述べている。同祭りの会場である油壺湾は、三浦一族終焉の地となった場所であり、「三浦道寸」をはじめとする三浦氏の武者のほとんどが、油壺湾に朽ち落ちたという歴史的経緯を踏まえての慰霊祭である。

ここで行われる笠懸とは平安末期から鎌倉、室町時代にかけて流行した流鏑馬(やぶさめ)、大迫物(いぬおうもの)と並ぶ古号馬術、馬上から矢を射る「騎射」の1つであり、より実戦的で高い技量を要するものである。弓上手として知られた三浦一族に長く伝承されたことから、本祭りにおいて1979年に我が国初めての恒例行事として復活し、2023年まで続いている。この笠懸を実際に行うにあたり、神奈川県に本拠を構える一般社団法人大日本号馬会・武田流が射手を務め、また行事全般に運営スタッフとして幅広く参加している。

この度、三浦市経済部の協力を得て、祭り装束を身につけて「諸役」として、同祭りに参加させていただいた。

「道寸祭」に同じく「諸役」として参加していた三浦初声高校の生徒のみなさん、そして古屋唯生教諭に出会った事がきっかけで、農業クラブで育成した二ホンミツバチから採取したハチミツを使った新商品を、ともに開発することになった。

3.2. 基礎編 第2回調査

第2回調査では三浦でクラフトビールの製造販売を行っている「三浦ブルワリー」を訪れ、お話を伺った。同社は、三浦半島最南のブルワリーとして、この地域らし



写真1 道寸祭での参与観察の様子

いクラフトビールを提供している。三浦ブルワリーは以下の3つをミッションとして掲げている。1つ目は、三浦ブルワリーは同市唯一のブルワリーとして地域の食材を活用したクラフトビールを通じて新たな文化を創造していくこと。2つ目は、高品質かつクリエイティブなビールを丁寧に醸造し、業界全体の底上げに貢献すること。3つ目は、行政、同業他社、様々な地域事業者との協力を通じて地域経済活性化の一翼を担うことである(写真2,3)。



写真2 三浦ブルワリーの説明を受ける様子



写真3 隣接する工場を見学した様子

3.3. 応用編 第1回調査

10月12日に神奈川県立三浦初声高等学校の農業科のある和田キャンパスを訪れ、三浦初声高校の古屋唯生教諭、ボランティア部の高校生、農業支援員の方にご協力いただき、絶滅が危惧されているニホンミツバチの巣箱から貴重なはちみつの採取を行った。市販されているはちみつのほとんどは、人工甘味料や水あめを加えているが、実際に採取した、そういった添加物が一切入っていない、濃厚で甘いはちみつを試食させていただいた(写真4)。

また、三浦はちみつプロジェクトのポスターを作成し、明大祭で掲示した。

3.4. 応用編 第2回調査

11月9日に神奈川県立三浦初声高等学校の入江キャンパスにて、同高校の古谷央教諭とボランティア部の高校生、そして氷取沢高校のボランティア部の高校生の方と協力してはちみつクッキーを試作した。先の応用編第1回調査にて採取したはちみつを用いて、三浦市の新たな特産品を作るべく菓子類の試作を行った。三浦市の新たな特産品を作る過程に高校生や大学生などの若者世代を巻き込むことで、今後社会の中心になっていく若年層にも三浦への愛着を持たせる画期的な取り組みとなっている。若者だけでなく、障がい者や働きたくても働けない人などにもこの取り組みを広げられる可能性を秘めており、社会福祉的な側面においても重要な取り組みになりうる(写真5)。



写真4 はちみつ採取の様子



写真5 三浦初声高校でののはちみつクッキー試作の様子

3.5. 応用編第3回調査(販売所での商品紹介)

12月9日に三崎観光株式会社が運営している三崎口駅近くのテナントで三浦市の特産物の販売会を行った。同販売会では、「商学部松尾研究室」で作成したオリジナルTシャツを着て販売を行った。テナントには農協に出品できなかった規格外野菜を安価で農家から買い取り販売している。三崎観光株式会社の柴田氏曰く、「農家で生産する野菜の3割は、品質に問題がないにも関わらず出品できず廃棄するしかない」という状況で、生産ロスがかさんでいる状況が伺える。また、同テナントでは三浦の小麦粉から作られたパンを販売する「パン屋充麦」の商品などを販売し、三浦市での地産地消を進め、域内経済循環を促す役割を担っている(写真6)。



写真6 三浦観光(株)京急三崎口駅前店舗での商品紹介

4. 分析結果と政策インプリケーション

本研究で実施した計4回の調査実習で、神奈川県三浦市の地域振興と観光まちづくりについて、多くの知見が得られた。本項では、その中で、春学期第1回と秋学期第1回・第2回の調査で得られた新たな治験について示すことにする。

4.1. 道寸祭における参与観察

三浦市では年間を通じて、毎月のように、様々なイベントが開催されるなど、地域の再生・活性化に取り組んでいる(表1)。そのなかでも「道寸祭」は地域の歴史に根ざした祭りイベントであり、5月の目玉イベントと言えるものである。

道寸祭の来場者数推移を図2に示した。これによると1999年(3500人)～2001年(2000人)まで来訪者数は減少傾向をたどっている。しかし、2001年(2000人)～2014年(4500人)までは雨天時の2009年と2011年を除き、おおむね来訪者数が増加傾向にあった。その後、来訪者数は4000人程度で停滞するが、コロナウイルスの影響で2020年、2021年中止となる。2023年時点で3000人であり、コロナウイルス拡大前の来訪者数まで回復していない現状がうかがえる。

表1 三浦市の年間行事

1月	三浦七福神巡り・チャッキラコ・城ヶ島水仙まつり
2月	三浦海岸桜まつり
3月	三浦国際市民マラソン
4月	みさき食の神フェスティバル
5月	道寸祭り
6月	八雲祭・城ヶ島あわび祭り、いせえび祭り
7月	みさき白秋まつり碑前祭・海南神社夏の例大祭
8月	三浦海岸納涼まつり花火大会・みうら夜市 三崎城ヶ島夏まつり・三戸のオショロ流し
9月	若宮初声っ子相撲大会
10月	三崎港町まつり
11月	面神楽
12月	三浦三崎マクロ争奪将棋大会

資料: 三浦市経済部資料より作成

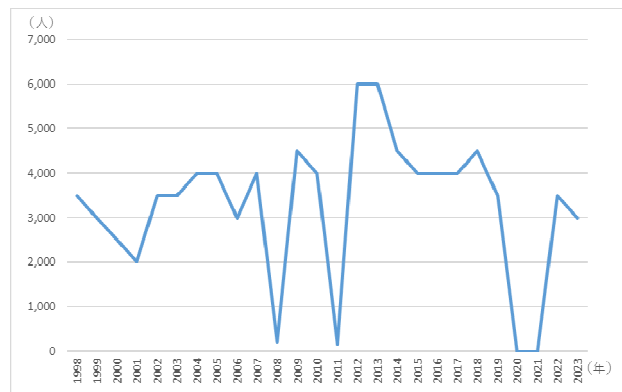


図2 「道寸祭」来訪者数推移

資料: 三浦市経済部資料より作成

注: 2020年と2021年はコロナ禍のため開催が中止された。

今後道寸祭への来場者を増やし、三浦の観光による地域経済活性化を図るためには、同市だけの取り組みにとどまらず、イベントの協力企業である京急電鉄(株)、その他の地元企業と協働でのPR活動での祭りの周知が非常に重要であることがわかった。さらに三浦市の持続可能な発展を目指し大学との連携も必須であり、産官学の緊密な連携が取れるか今後に期待したい。

4.2. 三浦はちみつを利用した観光商品の開発

本講義で実施した三浦市におけるはちみつを使った新商品の開発により、三浦市の観光振興に大きな貢献をもたらす可能性があることが、調査結果より得られた。調査で得られたインプリケーションは以下の通りである。

1 つ目は地域独自性の強化である。三浦市の二ホンミツバチから採取した天然はちみつは、地域独自の素材であり、三浦市のブランド力を強化する助けとなる。観光客は地元

特産品を求める傾向があり、地域資源の付加価値を高めることで、観光振興を促進させる可能性を秘めている。

2 つ目は、地元経済の活性化である。新商品の開発および販売によって、地元の生産者や関連事業者との連携が深まり、地域活性化につながる事が予想される。本商品においては、明治大学商学部、神奈川県三浦初声高等学校の発案で、地元の二ホンミツバチを育てている「農業クラブ」と地元の製菓会社の協力を得て開発を試みる。この新商品の開発では、商品販売による経済効果が得られるだけでなく、三浦市での産官学の連携を進めることに繋がり、地域内のまちづくりに対する士気の高揚を通して、住民同士の繋がりを醸成する効果がある。

3 つ目は、新たなターゲット層の開拓である。天然はちみつは健康食品としての需要が高く、健康志向の観光客層に訴求できる可能性がある。添加物や加工度が低い素材としての魅力を打ち出し、付加価値を高めていきたい。

5. おわりに

本稿では、人口減少・高齢化の進展により地域経済が衰退しつつある地域の活性化策として期待される神奈川県三浦市における観光産業の取り組みに着目し、事例分析を行なった。調査対象とした三浦市は、かつてはマグロ、サバなどの漁業とキャベツ、大根などの都市近郊野菜の産地として発展したが、輸送技術の発展とともに地域的な優位性が薄れ、近年は人口減少が進み、2019 年に「消滅可能性都市」に指定されるまでになっている。

三浦市では、人口減少、少子高齢化の進行、ボリュームゾーンが生産年齢人口から老年人口にシフトする予測から、地域経済力の減退が予測される。そのため、三浦市外部からの観光客の呼び寄せ、域内での消費を促すことが喫緊の課題となっている。市の方針としては、観光業が農業、漁業と連携することで、6 次経済の構築を図り、地域活性化を促し、三浦市の経済力の回復を促そうとしている。

本研究では、三浦市の代表的な伝統行事である「道寸祭」に参加し、地域住民位対する参与観察を行なった。その結果、道寸祭のような大々なイベントに、観光客が多く訪れているから、同様の何かしらの地域的な祭りイベントを用いて、観光客を誘引することで、三浦市に多くの観光客が継続的に訪れる可能性があるかと推察される。

また、現地での住民に対するアンケート調査の結果、みさきまぐろ切符を利用して三浦に訪れている人が多いことが分かった。ただし、第1 次産業の従事者が減少している傾向にあり、三浦市が今後観光による経済効果で持続的に発展していくためには、現在の三浦市の主力の観光特産品となっているまぐろや大根だけではなく、新たな観光商

品を開発すべきであると言える。

そこで、本研究調査において、新たな観光商品の開発を企画した。新たな観光商品の特徴としては、地域の魅力が詰まったもの、三浦市までの移動に伴う時間的、金銭的コストをかけてでも所有したい、経験したいと思える新商品でなければならないと考えた。つまり、「都会では味わえず、三浦でしか味わえない」というような差別化がされている必要がある。

そこで商品の「物語性」を重視した商品開発であるに着目し開発を試みた。新規商品に顧客の目を引くようなバックグラウンドがあれば、他の類似商品と差別化できるであろうと考えた。今回の新規商品には三浦でとれた「二ホンミツバチ」のはちみつを新たな観光商品とし、他商品と差別化できる次の2 つの物語を前面に押し出した。

1 つ目は、高校と大学、行政、企業が連携した、つまり「産官学」が連携して作り上げたはちみつであること。2 つ目は、二ホンミツバチの希少性と、ポリネーター(花粉媒介者)としてミツバチが経済基盤の確立と環境保全上重要な役割を担うことを周知させることである。特に前者に関しては、他に類を見ないコラボレーション商品となるため、独自のポジショニング形成に成功し、売上につながると予想した。

しかし、顧客視点に十分に立てていないという点が現時点で懸念される。即ち、顧客の視点から、「ここでしか手に入らない」という特徴が重要という理由による。したがって、何か追加で革新的な要素により、差別化をはかることができる商品開発「〇〇×産官学連携」を次年度以降に期待したい。

そもそものはちみつ商品の開発はその成否にかかわらず、非常に重要な意義があると考ええる。なぜなら、今回の開発で、はちみつ6 次化の前例を作ることこそが重要であると考えからである。今回開発する商品をきっかけとして、今後も、はちみつを使用した商品が三浦市で多く生産されることが期待される。

今後の展望としては、年に1 度はちみつを使用した商品を出店する「はちみつフェスタ」を開催し、農業・漁業従事者・小売業者などにはちみつを使用した商品開発を促すことで、結果的に三浦はちみつを広めていくというものである。「漁業×はちみつ、農業×はちみつ、〇〇×はちみつ」など多様なスタイルを想定している。まさに三浦市の6 次経済の政策に、「はちみつ」が仲介者(媒介者)となり、農業、漁業、観光業を盛り上げ、地域活性化に寄与することが期待される。

三浦がはちみつの名産地としてブランドが確立すれば、観光客の増加とそれに伴う域内消費の増加により、地域経済力の回復が見込まれる。差別化を図ることができる商品

開発「〇〇×産官学連携」が実現し、はちみつを使用した商品が作られることで、地域経済の活性化に寄与するであろう。

参考文献

厚生労働省「人口動態調査」

(<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00450011&tstat=000001029997>).

国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

(<https://www.ipss.go.jp/pp-shicyoson/j/shicyoson23/1kouhyo/gaiyo.pdf>).

総務省「国勢調査」

(<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/index.html>)

三浦市「三浦市観光ビジョン」三浦市HP

(<https://www.city.miura.kanagawa.jp/material/files/group/27/kankoushinnkouvision.pdf>).